

[1]北陸古代史概論(越前、越中、越後)

H25.1.22

(1)北陸の古代

1)古代の北陸

北陸は日本海側に位置し古代の大陸文化の流入口の役割を果たしていた。
記紀を中心とする文献資料では北陸は「高志」、「越州」、「越」・・と表記される。
北陸各国とヤマト国家との関係は地域毎に異なり一様には論じえない。
北陸地方の政治的・社会的形成については気多(ケタ)政治圏とか彦坐(ヒコマス)王国などと提唱する人もある。
日本海側の国々は早くから日本海の海上交通により相互に軍事・経済・文化等で関係が深い。特に越前より以東は(若狭～丹波)との接触が早く一方ヤマト朝廷はかなり遅れて近江を介してコシと接触している。

2) 古代コシとは

1. 北陸(コシ)

コシは(越・高志・古志)と漢字表記される。
古代大和朝廷の飛鳥文化については、百済の影響よりも多分に高句麗の影響が見られる。百済文化は主として九州筑紫から瀬戸内海経由で伝来したと考えられており、一方新羅・高句麗の文化は日本海地方から大和へ伝来したようである。
日本海は古代において中国、韓国、東南アジア、ロシアからの文化交流の窓口であった。
西回り文化(対馬海流):九州、中国江南、朝鮮文化の伝来
東回り文化(リマン海流):東北・蝦夷・北海道、高句麗・渤海、シベリア・サハリン

2. コシの古文書

- ・万葉集「新羅斧」
- ・今昔物語「犀角入り漆箱」
- ・六国史「朝鮮三国・船漂着記事」

3. 高句麗文化

- ・能登蝦夷穴古墳、古磨志彦神社
 - ・飛鳥寺の伽藍配置(高句麗の清岩里廢寺様式)
 - ・聖徳太子の師(慧慈)は高句麗の僧
 - ・高松塚古墳に高句麗の影響が見られる。
- 727年国交関係樹立(第1回)～第2回(739)・・合計35回/180年間
9世紀はじめに福良津の客院建設
高句麗=コマ(高麗・狛)、宣明暦(奈良～江戸時代まで)
コシの漢字文化交流:酬唱漢詩文の交換

3)弥生・古墳時代前期の越(越中・加賀・口能登・羽咋・七尾・・)

- ・”北つ海の道”の交流がかなり古くから始まっていた。
- ・漁業生活中心の場で焼き塩生産はなされていた。
- ・玉の生産については、弥生中期から古墳時代前期にかけて、出雲から佐渡にかけて既に玉生産がなされていたが古墳時代中期に機内型古墳(越前河和田遺跡・加賀・片山津遺跡)からは異質の玉が生産開始されたようである。
- ・弥生時代後半、首長を中心に共有集団労働(農業共同体)が形成されてきた。
- ・4世紀末から5世紀前半に地域的政治体制が確立されて巨大古墳が出現する。
七尾市の邑知地溝帯には単なる墓ではなく記念的建造物である巨大古墳出現。
小田中親王塚(円墳: Φ67m * h17.5m)
雨の宮一号、二号とも:(前方後円墳:l=70m)
亀塚古墳(円墳: Φ50m)

4)出雲と越

日本海側各国の対馬海流による文化伝搬として、出雲特有の四隅突出墳丘墓は越後にも見られる。コシの諸地域に古墳群が形成されるのは4世紀末から5世紀にかけてであり、この頃諸豪族間の抗争が激化して地域的統一が進んだと考えられる。

また、古事記でスサノミコの大蛇退治話では、八俣の大蛇はコシから来る。「大国主が婚(よばい)に行った先はコシ」などと出雲と越の強い繋がり推測される

「出雲の国風土記」の国引き神話でも、「高志(コシ)の都都(スズ)の御崎」が引き寄せられたとされ、他にもコシから人々が渡来し、出雲にコシ村があったようである。

(2) 北陸と大和朝廷

北陸とヤマト国家の関係の特徴として、当時の政界主導者・蘇我氏が6世紀末～7世紀初において百済・新羅から大陸文化を摂取していたが、朝鮮半島情勢変化で百済・新羅パイプが壊れてから北陸来着の高句麗と接触の必要性が生じた事でコシとヤマト朝廷が結びつくことになった。

1) 蘇我氏(6世紀末～7世紀初)

(北陸のヤマトへの朝貢)

コシの諸地域の豪族が直接ヤマトの政治勢力と繋がり始めたのは6世紀半ばになってからである。コシ三国出身の豪族が男大迹(ヲホト)大王(継体天皇)としてヤマト政権に擁立された。

これには大和政権内部で物部氏や新興の蘇我氏と対立を深めた大伴氏が近江の三尾君(コシの加我国造、羽咋国造の祖先豪族と繋がる)を擁立した経緯がある。6世紀半ばになって、それ以前はヤマト政権と距離を保っていたコシから江沼裙代(エヌマモンロ)が「高句麗使を現地豪族が手許に留めている」とヤマト朝廷に申し出た。大和政権は蘇我氏と関係の深い膳臣傾子(カンワテノオミカタブコ)を派遣し、現地豪族・道君(みちのきみ)が摂取していた高句麗使の調物を収納し都へ案内している。

この頃から、コシはヤマト政権(欽明朝)の直接支配下に入り始めたと推定される。

蘇我氏は近江の佐々木氏～コシの高志(コシ国造)氏、道君(ミチノキミ)～加宜氏(カカ国造)～能登(国造)氏、高志深江氏との結合を実現して、欽明天皇・敏達天皇時代の高句麗外交を確保し、北陸を海外文化(高句麗文化)の流入口と位置付けた。

○コシの国造(クニミヤツコ)

国造(クニミヤツコ)への地方豪族の任命は一般には5世紀半ば以降とされているがコシの豪族がヤマト政権と関わり始めたのは6世紀半ば以降である。

この当時の口能登に方墳で面取りされた石室を持つ院内勅使塚古墳がある。

蘇我氏一族が前方後円墳に続いて多くの方墳を造営している事から現地の豪族を「能登国造」に任じた記念的造営物との見解もある。

能登における古代国家体制は7世紀末に完成し、その後律令体制に引き継がれる

2) 奈良時代～平安時代(8世紀～9世紀)

1. 渤海使

中国東北部から朝鮮半島北部に渡る領土を占めた渤海国とは奈良時代初め(727)から国交関係を開始し、第2回739年以降約180年間継続された。

新羅とヤマト政権の緊張関係で近攻親遠政策が取られ北陸が大陸文化流入口に。渤海使の来航は727年～926年まで渤海国の滅亡まで35回に及ぶ。

859年能登に来航した渤海使には加賀国の権掾(ごんのじょう)が対応、漢詩に堪能な越前国司が支援として任ぜられた。この時の交歓漢詩・酬唱漢詩郡と唐からの宣明暦は文化的意義の高いものであった。実際、宣明暦は貞観4(862)年～江戸時代の貞亨元(1684)まで使用された。

渤海との長期交流の結果、我が国にはコマ(高句麗、高麗、狛)関係の社寺・遺物・遺跡が多く見られる。

2. 高麗文化

万葉集にもこの当時「新羅斧」が歌われ、時代が下って「今昔物語」に「犀角を収めた漆箱を乗せた平桶が流れ着いた話」、また六国史に「朝鮮三国の船が漂着した」記事がある。

大陸との交流の証しとして式内社に美麻奈比古(ミマナヒコ)、比咩(ヒメ)神社があり、能登には新羅で発達した神像石を祀る式内社が有る。

高句麗文化の影響を示すものとして、

コシには高句麗様式の濃厚な能登島の蝦夷穴古墳や式内社の古麻志比古神社ヤマト飛鳥文化では飛鳥寺の伽藍配置が高句麗の清岩里廢寺に通じるもので、聖徳太子の師が高句麗僧・慧慈(エジ)であった事などがある。

7世紀末から8世紀初頭造営の桧隅・高松塚古墳壁画に高句麗の影響が指摘されている。

3. 藤原氏時代(8世紀～)

8世紀半ば以降は藤原氏の政界主導期に移る。特に北陸は藤原仲麻呂政権の時、757年に能登国が設置された。

[2]敦賀の古代史

(1) はじめに

敦賀と言えば、正一位の気比神宮、景勝の松原海岸、越前ガニ・・・。
古代大和朝廷の飛鳥文化については、百済の影響よりも多分に高句麗の影響が見られる。百済文化は主として九州筑紫から瀬戸内海経由で伝来したと考えられており、一方新羅・高句麗の文化は日本海地方から大和へ伝来した。
日本海は古代において中国、韓国、東南アジア、シベリアからの政治・経済・文化交流の窓口であり、古代においては日本海側は表日本であった。
その日本海窓口の一つが敦賀湾であると言われている。
西回り文化(対馬海流):九州、中国江南、朝鮮文化の伝来
東回り文化(リマン海流):東北・蝦夷・北海道、高句麗・渤海、シベリア・サハリン
敦賀は笙の川と瀧湖を中心に文化と政治が発展したと言われる。
敦賀を中心とする地域には4～5世紀頃の定型的な前方後円墳がなく、唯一この地域で最大の向出山一号古墳があり、金銅装武具が副葬されていた。
敦賀郡と言う名称が初めて見えるのは天平3年越前国正税帳(大日本子文書)であり。敦賀津の名前は奈良時代末から平安時代中期以降の諸資料にある。
敦賀はその昔、伽耶から「ツヌガアラシ」の渡来伝承(日本書紀:垂仁2年)があり「角鹿(ツヌガ)」と呼ばれていた。
崇神天皇の世に額に角のある人が船に乗って、越国の筥飯浦(ケヒウラ)に渡来したとある。
笙の川流域にはツヌガアラシの後裔の名前の地名がある。例えば市の橋(大市首氏)、清水(清水首氏)、疋田(辟田首氏)など。(新撰姓氏録)

古代文献記録に現れる敦賀関連記事を参考に以下に示す。

垂仁天皇2年(BC28)

仲哀天皇(193)

ツヌガアラシの渡来

応神天皇(270)

角鹿行幸記事

武烈天皇(600)

角鹿行幸記事、気比大神との易名交換記事

角鹿の塩を大和朝廷に献上

敦賀と大和朝廷の関わりが現れるのは明確ではないが6世紀後半以降であろう589年「阿倍臣を北陸道の使に遣わして、越らの諸国を觀らしむ」(崇俊天皇)時代の6世紀末まで大和朝廷は越の諸国の国境さえ十分に把握できていなかった。
敦賀とヤマトの間に琵琶湖西岸の三尾氏、東岸の息長氏等豪族が介在した。
大和朝廷は蘇我氏の時代(6世紀末)にようやく北陸と関係を持つ必要が生じた。
大和朝廷は6世紀以降、遠交近攻政策で高句麗・渤海と遠方交流し対立する新羅に近攻政策上比較的交流のある日本海側の諸国を通じて情報入手と浸入防止対策を講じる必要があった。

国造本記では成務天応時代に「建功狭日命(タケイサヒミコト)」が最初の国造と記載されているが信用できない。

古事記では角鹿海直(ツヌガアマノアタイ)が海部で海産物(塩、かに他)を献上したと記載されており、現地首族の長であったと思われる。

大化の改新では、郡ができたのではなく、評(こおり)が初めてできたようである。

全国的にも大化改新の痕跡は無く、敦賀では大宝律令(701)で評が郡に変わった。

敦賀は角鹿の国～角鹿評～敦賀郡と変遷し、敦賀の名称は奈良時代半ばに誕生8世紀～9世紀に外交上、軍事上敦賀津は最も重要な官港となった。

766年以降、越前・越後・越中・能登・若狭等北陸全ての税は敦賀津経由となる。

804年敦賀松原客院の設置(国兵部省+越前国司+敦賀郡司・津守の三体制管理)渤海との文化遺産は漢詩酬唱文学、江戸時代まで採用された宣明歴。

(2) 敦賀の古代

1) 敦賀の地名由来(ツヌガアラシト)

敦賀は古くは角鹿(ツヌガ)と呼ばれた。この地名由来の一つが「ツヌガアラシト」渡来伝承である。

ツヌガアラシトは大加羅国(オオカラコク)の大伽耶(オオカヤ)のひとつ金海加羅(キンカイカラ)の王子。

ツヌガは新羅や金官加羅では最高官位である「角干(スブルカン)」が日本訓でツヌカンと読んだとの説もある。更に阿羅斯等(アラシト)＝貴人への敬称であるから

ツガアラシとは「韓国の貴人」の意である。

ツガに関して「額に角のある人」(日本書紀垂仁記)と記された由縁は角状の冠からとか、新羅の角杯からとか、ツガ(角鹿)と言う人名からとの諸説がある。

ツガアラシの敦賀への渡来伝説は天之日矛(アマノヒボコ)渡来説話から派生したものとの意見も有るが全く別物である。ツガアラシは任那王子であり、アマノヒボコは新羅の王子である。と言っても勿論、当時は新羅人も敦賀に渡来している。

ツガアラシの痕跡としては

気比神宮東方の境内摂社になっている式内社角鹿神社の祭神はツガアラシである。笙の川流域にはツガアラシの後裔の名前の地名がある。例えば市の橋(大市首氏)、清水(清水首氏)、疋田(辟田首氏)など。(新撰姓氏録)

(垂仁記の説話1)

1) 崇神天皇の世に、額に角のある人が船に乗って筥飯浦(ケイウラ)に渡来した。

2) この人は、意富加羅国(オホカラコク)の王子で名は「都怒我阿羅斯等(ツガアラシ)」
亦の名「于斯岐阿利叱智干岐(ウシキアリシチカンキ)」と言ひ穴門～出雲を経て至る。

3) この年崇神天皇が崩御され、垂仁天皇に仕えて3年目を迎えて、

4) 垂仁天皇はツガアラシに「汝の国に帰りたいか」と訪ねたら「そう願っている」と答えたので「汝の本国の名を先の崇神天皇の名を取って御間城(ミマキ)=任那と改名するように告げられ本国に帰った。彼の本国を任那国(ミマナ)と呼ぶ。

(垂仁記の説話2)

本国に居た「都怒我阿羅斯等(ツガアラシ)」が心を寄せた女が日本国に去った後を追った所、女は難波の豊国豊前(豊後国国崎郡)の比売語曾社に入った。

2) 律令制度と敦賀

1. ツガ国造

記紀には「角鹿国造」と言う文字は全くないが、角鹿国造が存在したと推定される。一つは、古事記ができたところに「角鹿海直(ツガノアマノアタイ)」が居たことが孝靈記に記されている。直は国造に与えられる姓であるので「角鹿海直」は国造りクラスの現地酋長が6世紀頃にいたと見れる。

角鹿海直は漁業をはじめ海上交通の仕事をした海部の統率者と推定される。

また律令制の時代に角鹿直、敦賀直と称する以下の人物が見られる。

角鹿直綱手(大日本子文書天平3年)、敦賀直嶋麻呂(続日本記天平神護元年)

更に敦賀の地から采女が出ていた事からも角鹿国造の存在が確かめられる。

国造の支配

敦賀地域の首長が大和朝廷の国造りとなることで、トネリ・ウネメ等の人的貢献と納税が必要となってきた。

海部として、海産物(塩・海草・雑魚・カニ等)の調備を強られるようになる。

敦賀の塩が大和朝廷の用塩となっていた(武烈天皇記)、敦賀の蟹(応神天皇段)も納められていた等の記載がある。

港も、律令制下で敦賀津は地域の要港から国家の要港へと変化していった。

能登、越から東方を含めて日本海航路の拠点として敦賀津を重視した。

2. 越前国敦賀群(8世紀初)

大化の改新(645)による群制度の施工はツガ国造の支配した時代には

痕跡が無く、恐らく701年の大宝律令によって群制への移行がなされたもの。

越前国への大和朝廷の支配が及ぶのは持統天皇692年が初めてであり、689年の飛鳥浄御原令の結果であろう。

越前国角鹿評が701年大宝令の施工により越前国角鹿郡となったと思われる

この角鹿郡が713年の「機内7道の諸国郡郷の名は好字をつけよ」により敦賀郡と改名されたと思われる。

角鹿から敦賀への用字変更最初の記事は天平3年の越前国正税帳である。

北陸では新の角鹿郡司も越前国司も旧国造が任命されており、機内とは異なるその後、敦賀郡司とは異なり、越前国司は中央から貴族が派遣されてきた。

740年には郷里制が敷かれ、里制～郷里～郷制(50戸)へと変った。

律令制の北陸への浸透は713年越前国正税帳により理解される。

正税は住民の田に租税を課して徴収し、官有倉庫(正倉)に貯蔵された稲穀で、

730年、敦賀郡司の大税は約6300斛(コク)、穎稻(エトウ)は15000束、糶(ホシヒ)300斛であり、越前国司へ納入された敦賀郡正税の比率は約3%であった。

これ等の税の収入・支出は郡稻帳で明細がわかる。

その後班田制が施工されて租、調(絹・布・糸・塩等手工業品、海産物)、庸(布他)租(3%)は比較的軽かったが調・庸・出挙・雑徭等人々の負担は増加した。

3) 気比神社

気比神社はもともと食物の神様で地主神であった。

延喜式では敦賀郡には式内社43座とされ、気比神社と撰社とからなる天つ系神社で7座と撰社である天利剣・天比女若御子・天伊佐彦他に常宮の天八百万比咩の末社である天国津彦・天国津比売・天鈴・玉佐々良彦各社がまた地名を引く神社としては剣神社(横浜)・阿蘇村利椋神社・五幡神社・田結神社・金前神社(金ヶ崎)・角鹿神社(気比撰社)・白城神社(白木)・三前神社(立石)・久豆弥神社(香見)・等が祭祀されている

敦賀郡司の関係する神社は気比神社・角鹿神社・天国津彦・比売神社など。

北陸では式内社ではないが渡来系の漢神(韓神)信仰が根強かったのが特色。

気比神社の驚異的な格式の昇格は次のような経緯があり目を見晴るものがある。

731(従3位の神階)藤原武智麻呂が比叡山で夢を見て気比神宮寺を起創した。

770(奉幣) 恵美押勝の乱平定後奉幣があった。

771(剣神叙勲) 新羅との外交政策上で北辺警備の強化で従4位叙勲

809(解由状) 気比神宮の宮司交代には解由状を必要とした・

835(正3位) 気比神宮の祝・祢宜の神官に把笏が認められた。

その後気比神社は、9世紀に全国一位の正一位を授かる。

古事記「仲哀段」に神宮皇后が朝鮮出兵の後、筑紫で生んだ太子(応神天皇)と

ヤマトへ帰る時に香坂王(カゴサカオウ)、忍熊王(オシクマオウ)と抗争して穢れた為、竹内

宿禰は太子(品陀和気命ホンダワケ)をつれて禊のため近江～若狭を経て角鹿に入り

その地の伊著沙和気(イササワケ)大神と名前を交換して、易名の幣に入鹿魚を献上

したお礼に、イササワケ大神の名を讃えて御食津(ミケツ)=気比大神と名づけた。

但し、神宮皇后、応神天皇も架空の人物との説もあり由縁は史実とは言いがたい。

また易名の幣とされた入鹿魚(イルカ)が大漁に鼻に傷を負い血だらけで浜に打ち寄せ

た様からこの浜辺を血浦(気比浦)と呼んだとの記載もある。

筥飯浦(ケイウラ)にいた気比神についてのヤマト朝廷の最初の記載は692年に越前

国司が角鹿郡の浜で捕まえた白蛾(シラキヒル)鳥を献上したので、朝廷は筥飯神に

封戸20戸を加増したとあるのが最初である。(日本書紀持等天皇記)

4) 大和朝廷と敦賀

記紀には「角鹿国造」と言う文字は全くないが、古事記の完成前に「角鹿海直(ツヌガノ

アマノタイ)」が居たことが孝靈記に記載されている。直(あがた)は国造に与えられる

姓であるので「角鹿海直」は国造りクラスの現地酋長が6世紀頃にいたと見れる。

角鹿海直は漁業をはじめ海上交通の仕事をした海部の統率者と推定される。

敦賀地域の酋長が大和朝廷の国造りとなることで、トネリ・ウネメ等の人的貢献と

納税が必要となってきた。

やがて海部として、海産物(塩・海草・雑魚・カニ等)の調備を強いられるようになる。

敦賀の塩が大和朝廷の用塩となっていた(武烈天皇記)、また敦賀の蟹(応神天

皇段)も納められていた等の記載がある。

港も、律令制下で敦賀津は地域の要港から国家の要港へと変化していった。

能登、越から東方を含めて日本海航路の拠点として敦賀津が重要になった。

越前国角鹿評が701年大宝令の施行により越前国角鹿郡となった。

この角鹿郡が713年の「機内7道の諸国郡郷の名は好字をつけよ」により敦賀郡

と改名されて「角鹿」から「敦賀」への用字変更最初の記事は天平3年の越前国

正税帳である。律令制の北陸への浸透は713年越前国正税帳により理解される。

5) 愛発関(あらしせき)

(関所) 敦賀津の発展と共に敦賀から塩津の道が重視されるようになった。

古代敦賀郡には松原駅・鹿蒜駅の2駅があつて塩津道とは別ルートに駅があつた。

駅は兵部省兵馬司の所管で、敦賀は京から見れば北陸道の入口にあたり重要な

地点であつたので愛発関(あらし)がおかれた。

愛発関は東海道への鈴鹿関、東山道への美濃不破関と共に三関と呼ばれた。

愛発関は越前国司の所管下に置かれた。708年には史生が追加された。

関司は国司の目以上の者と決められ、愛発関でも監関は掾が担当した。

愛発関の緊張した役割例

・721年元正天皇死去、・729年長屋王の変、・756年桓武天皇死去ときなど

・中でも764年恵美押勝の乱では愛発関は渦中に置かれた。

最初は太政大臣の恵美押勝から固関と軍兵の徴発指令があり、その後

反対に孝謙天皇から恵美押勝を反逆者として取締る令が出て衛門少尉佐伯

伊多智が直接乗り込んできて警戒態勢を整え逃亡を阻止した。

敦賀直嶋麻呂も手兵を連れ支援し、その功勞で後日・称徳天皇より外従5位下の昇進を受けた。

愛発関の場所については未だ確定されていないが現在の疋田周辺が有力その後；

780年 蝦夷の大反乱があり改めて北陸地方の軍事体制を強化検討。

782年 氷上川継の反乱のとき固関した。

789年 長岡京(桓武天皇)新政府から蝦夷征伐上で愛発関の停廢命令が出た。

806年 桓武天皇の死没の際にも旧関として固関され、その後愛発関は消えた

6) 敦賀津(敦賀港)

日本海海上交通ルートは「北の海つ道」と呼ばれ対馬海流による敦賀西部との航路とリマン海流による北方からの東部ルートが早くから開けていた。

・ツヌガアラシ敦賀へ渡来(加羅国出發～穴門～出雲～角鹿津に定着)

・敦賀から神宮皇后による熊襲征伐航路(角鹿～淳田門～穴門～豊浦)

蘇我氏の時代になり、敦賀津の役割は日本海の海上交通拠点に東方の要港として重要視される様になってきた。

若狭から越前への陸路と別に敦賀津が越への官人赴任の経路となってきた。

越前比楽湊、能登加嶋津、越中日理湊、越後蒲原津、佐渡国津等の北陸諸国の各種荷物が全て敦賀津に回送されて、陸路で琵琶湖の近江塩津まで車馬で駄送され、北陸諸国と都を結ぶ官人・物資輸送の拠点となっていた。

敦賀津は郡司・津守によって直接管理されていたが、造船は国司が管理し、船舶の管理は兵部省の主船司・検船使が直接あった。

7) 神社関係

延喜式では敦賀郡には43座が式内社とされ、氣比神社と撰社となっている天つ系神社と少数であるが地名を負う神社とがある。

氣比神社は7座と撰社である天利劍・天比女若御子・天伊佐彦、他に常宮の

天八百万比咩の末社である天国津彦・天国津比売・天鈴・玉佐々良彦各社。

地名を負う神社としては劍神社(横浜)・阿蘇村利椋神社・五幡神社・田結神社

金前神社(金ヶ崎)・角鹿神社(氣比撰社)・白城神社(白木)・三前神社(立石)

久豆弥神社(香見)・等

敦賀郡司の関係する神社は氣比神社・角鹿神社・天国津彦・比売神社。

北陸では式内社ではないが渡来系の漢神(韓神)信仰が根強かったのが特色。

8) 渤海使

渤海との遠交、新羅との近攻政策で渤海使は727年～926年まで35回に及んだ。

・727年最初の渤海使が出羽国に漂着(24名)。

・「鳥孝慎」は841年判官で、849年副使として来所。

・859年能登国珠洲に使節長官「鳥孝慎」以下104名大挙してくる・

・861年鳥孝慎らが献上した宣明曆が頒行された。

・882加賀国に来所、漢文のできる渤海客使として越前国衛から島田が対応

9) 松原客院

渤海使は相次いで日本海沿岸へ来着した。

(773年)渤海使は筑紫に寄港するように日本海沿岸入港を禁止したがその後も

773年(能登国)・776敦賀郡・779と786出羽国と続いたので804年渤海使を丁重

にもてなす為に客院を造るように能登国に勅があり敦賀客院も造営された。

759年藤原仲麻呂は新羅征伐について渤海と情報交換して計画を立案

804年敦賀松原客院の設置(国兵部省+越前国司+敦賀郡司・津守の三体制管理)

この当時の文化遺産は渤海使との漢詩酬唱文学、江戸時代まで使用された宣明歴

815年 越前国で蕃客対応のため大船の徴発が命令された。

恵美押勝の乱(765)以降、愛発関の強化の他に、松原倉が対外事情も踏まえて

強化され、5万石保管されたと言う。松原官倉群の管理は敦賀津の管轄であろう。

この政策は757年頃からの藤原仲麻呂等主導の日本海側警備の強化の一環で

対新羅・渤海にたいして遠交・近攻政策で望もうとしたものである。

10) 渤海使

渤海との遠交、新羅との近攻政策で渤海使は727年～926年まで35回に及んだ。

・727年最初の渤海使が出羽国に漂着(24名)。

・「鳥孝慎」は841年判官で、849年副使として来所。

・859年能登国珠洲に使節長官「鳥孝慎」以下104名大挙してくる・

・861年鳥孝慎らが献上した宣明曆が頒行された。

・882加賀国に来所、漢文のできる渤海客使として越前国衛から島田が対応

[3]能登の古代史

(1)能登の古代

1. 能登の神社

- ・能登の神社は17社(延喜神名帳)、式内社43社、社名にヒコ・ヒメが多い。
- ・七尾市の祭神:気多神・住吉神・八幡神・山王神・薬師・石神・出雲神など。
- ・例外として出雲神社系の宿名彦と新羅系の石神神社が多く見られる。
- ・式内社: 美麻奈比古神社、比咩神社

2. 軍団整備

- ・能登の軍団は鳥屋町に設置された。3つの山は狼煙の遺跡
- ・軍団は大国(1000人以上)、中国(600人~1000人)、小国(500人以下)
- 隊制は伍(5人)、火(10人)、隊(50人)、

3. 税制(租庸調)

- ・能登では8世紀半頃から班田制が施行されたのではとされている。
- ・調、庸を都まで運ぶのは民衆の負担であった。(平安京まで往18日、復9日)
- ・土器・塩は生産していたが能登の税対象外であった。
- (租)延喜式で能登国から田租穀(4000斛)を民部省へ治め、15万束の出挙
- (調)手工業品と収穫物(糸・絹・イロコ・呉服・)
- (庸)真綿・
- (費)天皇の食膳に供する食物:鯖、ワカメ
- (薬) 宮内省に納めるもの:黄蓮・菱・ヤマイモ
- (能登から都奉仕)
- 743能登臣忍人が平城京の写経師として仕える。(右大舎人~左舎人)
- 760能登臣男人が造大寺司の画師として奉仕。

(2)律令制度と能登

1)大和とコシ

- ・7世紀後半まで大和朝廷とコシの関係はそれ程深くない。
- ・コシが漢字で(高志・古志・越)と宛てられたのが帝紀・旧辞とすると6世紀半以降
- ・越前国の誕生は692年(持統紀)浄御原令が諸司に頒布されてから3年後である。
- ・記紀にも古事記の一部だけで殆ど出て来ない。むしろ出雲との関係が深い。
- スサノオと「高志の八俣の大蛇」、八千矛神と「高志国の沼河比女」、国引き神話の「高志の都都の三崎」、出雲の国神門に「高志郡」など
- 邑知地溝帯七尾市に巨大古墳群が出現(5C末から6C/B)、
- 市内唯一の前方後円墳である高木森古墳と東部の矢田丸山古墳群(5C)は周辺円筒埴輪を廻らしている。これ等の首長が国造本紀に羽咋国造・能登国造と記される人物と関わるものであろう。

2 (能登とコシ国造

蘇我氏は6世紀前後に遠交近攻政策を取り高麗と外交を開く。
口能登の首長たちの中でヤマト政権・蘇我氏と関わりを持つものが現れた。
531~539年 コシ出身の継体天皇がヤマト政権に入る
570年欽明天皇 江淳が高句麗人の漂着をヤマト朝廷に申し出る
571年敏達天皇 高句麗人を山城に受容れるべく膳臣傾子を派遣
589年崇峻天皇 阿倍臣をコシへ派遣「越ら諸国の境を觀しむ」
※高句麗は551年に新羅・百濟連合軍に敗れて倭国に使いを出した。
中でも、5C末三国出身の男大迹大王(オウトノオウ=継体天皇)から欽明天皇時代に570年に南加賀の江淳裙代(エヌノモシロ)が、高句麗使が漂着した時にコシ口能登の豪族「道君」が隠匿していると申し出たとある。
この時中央政権は蘇我稲目・馬子の父子で山城の国相楽郡の外交館に迎える方針で膳臣傾子(カシワテカタブコ)を派遣し朝貢物を没収した。
これは、コシの豪族がヤマトに従属したと言うより、当時日本海側の首長たちが相対的にヤマト政権とは自立性を持った地域であったとの見方もある。
またヤマト側では蘇我氏の新羅との遠交近攻政策上、高句麗との外交関係を開いたと言う事でもある。
北陸地方の豪族「道君臣」を配下にして、ヤマト政権は道氏の主張したような地域的君主を承認したものと認められる。
越国造である阿倍臣・膳臣・佐々城山君・筑紫臣・伊賀臣は道氏らと同じ大彦命を同祖として配慮している。
高志・越国造と道氏とは同祖関係と伝えている。(国造本紀)
近江における佐々城山君・高志国造道氏・加宜国造・能登国造・高志深江国造

のラインが旧の近江三尾氏—加賀江淳氏—加賀造氏—羽咋国造氏の旧系統（継体天皇系統）に入れ替わったと見られる。

口能登の豪族道氏が「能登国造」「羽咋国造」に任じられる程勢力を持った。

3) 能登の国造

大化改新で班田収受も造籍も行われずに唯、蘇我氏滅亡の動揺を抑えるために地方に新政権の軍事使・伝宣使の派遣が実態のようでありコシもその通り。

平安時代の「国造本紀」では北陸の国造の任命は以下の記載があるが早すぎ能登国造は成務天皇時代に彦峽嶋命(ヒコサシマノミコ)が任命記事

羽咋国造は雄略天皇時代に石城別命(イワキワケ)の任命記事。

実態は6世紀末に蘇我氏が地元の豪族道氏を国造に任命したのが最初。

七尾線徳田の「院内勅使塚塚古墳」は横穴石室式方墳で壁面の切石加工が飛鳥の古墳と装飾も似ており、能登国司任命との関連で理解される。

北陸の部民の特色を石川県地域で指定された3種の代表的な部民として

- ・6世紀末～7世紀初に置かれた子代の部民

- ・特定の技術者としての部民

- ・ヤマト有力紙族の私民としての部民

であるが、能登では若倭根日子大比比命ワカヤマトネコオオヒビミコ(開化天皇)の名代としての若倭部と鳳至群の船木部がある。

4) 律令製とコシ

640年皇極天皇時代に百濟大寺の力役で「近江と越と丁」の徴発が出た。

大化改新(645)で新政府の派遣した国司は兵器没収と馬や関連物資の徴発と新政府の宣伝が主たる役目であり、むしろ蝦夷征伐が主たる目的であった。

- ・659年阿倍臣を将軍として蝦夷征伐事業が強力に進められた。

- ・北陸国造も参加したが660年へろへ嶋の戦いで能登臣が戦死した。

- ・689年飛鳥浄御原令により越前国が設置され、蝦夷対策が強化された。

- ・708年北陸越前に新国司・高志連村君が始めて任命された。

- ・越前国能登郡が成立しこれまで国造の能登臣氏が郡司に任命された？

- ・能登地域の郡司

- ・709年蝦夷対策として北陸四国に軍用船100隻の造船と力役が命じられた。

- ・717年最上川南岸の出羽の柵へ越前・越後・信濃・上野の四方国入植計画

- ・718年越前の羽咋・能登・鳳至・珠洲の4郡を持って能登国が設置された。

- ・この当時越前国は多治比真人広成が按察使として所管していた。

- ・能登国の駅舎整備(越蘇・穴水・撰才・三井・太市・待野・珠洲)による掌握。

- ・732年能登から平城京へ調を運搬した記録・木簡がる。(郡里制)

- ・741聖武天皇・恭仁京へ遷都時に官制縮小として能登国を越中国へ併合

 - ※前年(740)大宰府で藤原広嗣の反乱があり平城京から恭仁京に遷都

- ・746大伴家持30才は越中国衛として伏木(高岡市)に着任

- ・749年大伴家持が能登巡行で能登に対する律令政治の強化が見られる。

- ・752年鳳至郡大屋郷の調に能登臣智麻呂の名がある。

- ・757年能登国を越中国から改めて分立

 - 再設置理由は駅舎利用の負担軽減のため官舎整備を求めたもの

 - 光明皇后・藤原仲麻呂が橘氏、大伴氏を押切り東北蝦夷征伐の体制強化

 - 唐・新羅の政権不安定で北陸の警備強化(唐安史の乱、753新羅使節不調)

- ・758年唐の消滅は渤海使(小野田守)も報告していた。

- ・760年初めて能登国専任国司・高元度が任命された。(能登で班田前初調査)

- ・764年能登国二代目国司(村国連子老)は恵美押勝の差配

 - (称徳帝と道鏡への反乱、越前国国司=押勝の子(藤原辛加知)を任命

- ・780年越中国は糶(ホシイ)三万斛(コク)貯蔵し、東北反乱対策・蝦夷対策の前進基地
東北蝦夷の反乱で多賀城が壊滅状態となったと言う背景がある。

- ・791年阿倍朝臣人成を国司。792年兵士制を廃止して健児(コンゼイ)50人指定

- ・804年 桓武天皇:渤海使の客院設置を求める。(北陸は蝦夷より渤海が大事)

- ・808年 平成天皇:越蘇駅、穴水駅、鳳至駅の廃止。(桓武帝ノ財政破綻策)

- ・823年外交使対応の官舎を加賀国に整備した。

- ・824年新羅から漂着したものあり。(819唐の反乱、822新羅反乱で能登渡来が増)

- ・838年遣唐使派遣の停止、842年藤原衛は新羅人の入国禁止

 - 唐・新羅と国交断絶し渤海とのみ国交を続ける時代に入った。

- ・859年 渤海使104人「宣明曆」を持参、福良港の官港化と客院造営

(3)古代の輪島(鳳至:フケシ)

1. 鳳至地域社会

3世紀後半から4世紀はじめに掛けて能登でも農業生産の発達に伴い小地域社会が形成されていった。鳳至川、塚田川流域に四ツ塚古墳、稲船横穴古墳群が形成され始めたのは6世紀後半～7世紀に掛けてからである。

2. 船木部

能登号族がヤマト政権の国造に任命されたのは7世紀前後である。
能登国司は直接支配下の人民を若倭部に指定したとおもわれる。
正倉院に残る銘文に鳳至の舟木部とあり、鳳至にも船木部が置かれていた事が判明した。

3. 鳳至郡

輪島に古代国家の行政区画が出来たのは、701年大宝律令による鳳至郡である。
718年能登国の誕生により、越前国より分かれて羽咋・能登・珠洲・鳳至の四郡。
能登臣の一族で鳳至の郡司、郡家、駅など順次整備されていったのであろう。

4. 大伴家持(32歳)

国司:749年越中国鳳至に越前国司の大伴家持がはじめて巡行してきた。
巡行の経路は家持の五つの歌から仁岸川～八ヶ川～若狭川～鳳至川？。

5. 神社

古代輪島地域の神々は延喜式に見える九座でいずれも小さい。
鳳至郡の式内社はすべて、ヒコ神かヒメ神で美麻奈比古・比咩神は対になっている。

(4)古代の珠洲

1)はじめに

1. スズ地名

珠洲の郡名は延喜式の『須須神社』の須須=スニズズ=珠洲となる。
珠洲は能登半島の先端地で航海の異変を知らせる烽(のろし=すす)を使用。
ススはミホ・ススミ神名のススミでもあり、烽(ノロシ)の古訓ススミでもある。

2. 珠洲郡

718年:珠洲の地名が始めて大和朝廷の記録に登場する。それまで珠洲郡は越前国の珠洲郡であったが、羽咋・能登・鳳至の3郡に珠洲郡を含めて能登国とされた。
能登の国造任命時期について5世紀後半から6世紀書記の雄略天皇頃の推定もあるが早くて蘇我馬子が実権を握った6世紀後半であろう。珠洲の若倭部指定もその後であり、大和朝廷の官人が直接地方に来てでなく、能登の豪族が国造に任じられてから国造から若倭部・屯倉指定があったと考えられる。
若倭部(ワカタベ)は開化天皇(若倭根子日子大毘毘命)名代の民。(儀式・供物・貢納)

3. 古墳

珠洲地域には5世紀末には全くヤマトの影響は見られず、古墳時代後期の6世紀末に突然、永禪寺古墳群が表れる。(高塚古墳:円墳)

4. 神社

珠洲の式内社は古麻志比古神社・須須神社・加志波良比古神社の三社である。
これ以前の祭祀は日子座王命(ヒコマスオウミコ)で、出雲神魂神社の系統であろう。
朝鮮のコモス(熊麗)がカモス(神魂)=カミムスビ(神産巢日神)と繋がる。
従って珠洲若山川流域は出雲の信仰圏とつながる。
日子坐王は開化天皇(諡号は若倭根子日子大毘毘命)の子神とされた。
延喜式に見える須須神社と高倉彦神の社とは同じ神社である。
つまり高座神は高倉神である。更に美保須須見命は出雲の大穴持命と高志の意久都久辰為命(オキツクシイ)の娘=奴奈宣波比売神(ヌナカワヒメ)との子神
美保須須見の神は能登を含めた越と出雲を結ぶ神格である。

5. 律令制度

珠洲地域に律令制による郡製が施行されたのは、越前国能登郡から能登国珠洲郡に切り替わった718年以前である。
翌年719年に越前国守多治比広成が按察使(アゼチ)として能登・越中・越後三国の所管を命じられているので事実上はまだ越前国守の管轄下にあった。
この頃から国衙は越蘇駅近くに、中央から国司の下級官人が配され珠洲には郷・里の行政区画が整えられたと推定される。
令制下、珠洲郡には日置・草見・若倭・大豆の四郡と余戸がおかれた。(1郷=50戸)
珠洲郡の四郷は715年に、それ以前の里が郷とされた行政区画である。
珠洲郡家(クウケ)の設置は760年能登専任国司任命、843年のと国分寺設置の

頃に整備されたと考えるのが妥当であろう。

6. 渤海使

859年珠洲郡に26回目の渤海使が乗った船が着いた。一行は使節長「烏孝慎」

以下104名で郡家に迎えられた。(珠洲の管轄下では3回目であった。)

859年6月には上京したが先帝の喪中で入京できずに7月に帰国した。

この時貢上物が2年後の861年に頒行された宣明歴で1684(江戸)まで正暦とされた。